
フィデリオ

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フイデリオ

【Zコード】

Z3592F

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

監獄に新たにやつて来た若い看守フイデリオ。彼はそこで何かを探していた。その折悪名高い高官ピツアロも監獄に来ていた。その目的は、ベートーベン唯一のオペラを小説にしました。こちらにも掲載してもらっています。

<http://www.paintwest.net/>

第一幕その一

第一幕 監獄へ

高い塀に囲まれた刑務所であった。門は固く閉じられ中は一切見えないようになつてゐる。それだけでこの刑務所が唯ならぬ存在であることがわかる。その奥深くの仕事部屋で声が聞こえていたがそれは誰にも聞こえはしなかつた。

「おい」

若い茶色の髪の青年がその部屋に入つてきた。緑の目をして顔にはソバカスがある。背は高く筋肉質であつた。それを見ると彼が肉体労働に携わつているのがわかる。

「そろそろ休まないかい、マルツェリーナ

「ヤキーノ」

それを受けて部屋でアイロンをかけている少女が顔を上げた。見れば小柄で少しくすんだ蜂蜜色の髪をした可愛らしい少女だ。茶色の大きな瞳を持つてゐる。

「お昼だしさ」

「もう少し待つて」

しかし彼女はまだ休もうとはしなかつた。

「これが最後だから」

「そんなの後ですればいいのに」

ヤキーノはそう言って渋い顔をした。

「休み時間は決まつてゐるんだから」

「それはそうだけれどね」

しかし彼女はそれでも手を休めなかつた。

「お仕事は最後まできつちりやらないと」

「ちえつ、真面目なんだ、マルツェリーナは」

「それが仕事だからね」

いささか不真面目な様子のヤキーノの対して彼女は本当に勤勉で

あつた。最後の一枚を今終えた。ヤキーノはそれを見届けてからまた声をかけてきた。

「ねえ

「お昼御飯なら外で食べましう

「いや、それもあるけれど

「彼はもじもじしました。

「どうしたのかしら

「あのね、マルツェリーナ

「ええ

「ちょっとだけ聞いて欲しいんだ

「顔を赤くして言つ。

「何かしら

「僕と君はもう長い付き合いだよね

「そうね。何年経つかしら

「それでね、言いたいんだ

「何を？」

「僕とね、結婚してくれないかな

「それ前にも聞いたわね

マルツェリーナはそう言つて微笑んだ。

「これで何度もかしら

「何度も言うよ

ヤキーノも退くつもりはなかった。
「僕と結婚してくれ、お願ひだから

「貴方と

「なんだ。いいだろ？..」

「それは

だが彼女は言葉を濁した。

「駄目なのかい？」

「いえ

それには首を横に振る。

「そうじやないけれど」

「じゃあどうしてなんだい、僕じゃ駄目なのかい？」

「貴方のことは嫌いじゃないわ。これは本当に」

「彼女はそれは認めた。

「けれど今は」

「またそんなことを言つて。これで何度もなんだ」

「何度もだつていいでしょ」

マルツェリーナの口調がきついものになつた。

「貴方には関係ないもの」

「そんなことを言つのか」

「ええ」

彼女は答えた。

「とにかく今はそんな気分じゃないの。わかつた！？」

「クッ」

「おおい」

そこで外から年配の男の声がした。

「！？」

「ヤキーノ、いるかい？」

「何だろう」

「行つた方がいいわよ、ヤキーノ」

「ええ」

マルツェリーナは逃れられたと見た。ヤキーノはそれを残念に思つた。彼は仕方なくその場を後にしてた。

こうしてマルツェリーナは一人になつた。そしてほつと安堵の息をついた。

「とりあえずは行つたわね」

だがすぐに戻ってきた。マルツェリーナはそれを見て心の中で溜息をついた。だがえてそれを隠して彼に尋ねた。

「で、何だったの？」

「ちょっと午後の仕事のこととでね

彼は答えた。

「ちょっとした打ち合わせだ。けれどすぐに終わつたよ

「そうだったの」

彼女はそれに頷いた。

「それでまた聞きたいんだけれど

「また！？」

今度は露骨に嫌な顔をした。

「そうさ、さつきも言つただろう？僕は何度も確かめるつて

「あのね、ヤキーノ」

彼女はたまりかねて言つた。

「今は言えないわ、すぐに」

「それも何回も聞いたよ」

「それでもよ」

彼女は言い返した。

「これもさつき言つたわね」

「じゃあ答えは変わらないんだね」

「ええ」

彼女は答えた。

「とにかく今すぐは駄目よ

「そうか、わかつたよ」

彼はそれを聞いて止むを得なく頷いた。

「じゃあ今はいいよ。それじゃあね」

そう言って昼食を手に取つて部屋を出よつとする。

「けれど僕は諦めないからね」

マルツェリーナはそれに答えなかつた。彼女はそれを聞き流して

いた。

ヤキーノはその場を後にした。そしてマルツェリーナは今度こそ

一人になつた。

「やつとね」

ふう、と一息ついた。

「何を言つても駄目なのに。馬鹿な人」

彼女の心は彼にはないようであつた。では誰のところにあるのか。

「今までだつたら受けられたのに」

「だが今は駄目なようだ。それは何故か。

「フィデリオがいるから。その人には心を動かされなくなつてしまつたわ」

フィデリオとはこの前新しく来た看守である。ヤキーノの同僚にあたる。銀色の髪に青い目をした凜々しい若者である。背は高くスラリとしている。いつも物憂げな顔をしている。彼女は彼に心を奪われてしまつたのだ。

第一幕その一

「あの人私が私の夫となるのだつたら」

「彼女は呟いた。

「甘い喜びを以つて希望が心を満たすのに。朝から夜まで
もう彼と結ばれた時に想いを馳せていた。まるで夢見る少
女のように。いや、その時の彼女の心はまさに少女のそれであつた。
「休む時も。一切の苦しみもあの人の側だと癒されるでしょうに」
しかしそれはまだ夢の中だけであつた。そして永遠に夢の中のも
のとなるのではないかと内心心配していた。だがここで別の声がし
た。

「おうい

「お父さん」

彼女の父である看守長ロッコが部屋に入つて來た。白髪頭の壮年
の男である。髪は白いが髭は黒かつた。白い頭と黒い顔で實にコン
トラストであつた。厚い看守の服を着ていた。

「フィデリオは帰つて來たか?」

「いいえ」

彼女は首を横に振つた。

「まだよ」

「そうか」

彼はそれを聞いて頷いた。

「用事があるのだがな」

「何があるの?」

「うむ。わしは総督様にフィデリオを寄越すよつ手紙を書かなければ
ならんのだ。それで探ししているのだが

「そうだったの」

「もうそろそろ」ちに來る頃だつたのだがな。昼飯を受け取

りに

「じゃあここで待つたらどうかしり」

「そうだな。それがいいか」

そう言いながら昼食を手に取った。するとそこで扉が開いた。

「おっ」

「帰つて来たわね」

マルツェリーナの声がはしゃいだ。開かれた扉から一人の青年が入つて來た。

「どうも」

高いが鋭い、それでいてツヤのある声でその若者は応えた。何処か女のそれに似た声であった。見れば美しい顔をしていた。

「ああ、フィデリオ」

ロツコは早速彼に声をかけてきた。

「何でしようか」

「鎌の方はもういいのか

「はい、大丈夫です」

彼は凜とした声で答えた。

「どんな囚人でも断ち切ることのできない鎌ばかりですよ

「そうか、それならいい」

ロツコはそれを聞いて顔をほぐれさせた。

「御前は本当によくやつてくれているよ。御前みたいな若者がいてくれて本当に助かる」

「有り難うございます」

「何時かこれに報いなくてはな

「報いとは

マルツェリーナはそれを聞いて顔を明るくさせた。

「まさか

「まあそれはいざれな。ところでだ

「はい」

「総督様がこのセヴィーリアから御発ちになられるのは知っている

な

「勿論です」

「なら話は早い。わしは総督様に御前のことをつて手紙を書かねばならんのだ」

「どうしてでしょ、うか

「決まつている。御前の立派さにつてだ」

「いや、それは

「い」で彼は謙遜した。

「私などはとても」

「いや、いや、御前程立派な若者はおなじみ。いは是非申し上げておかねばならんからな」

「申し上げたらどうなるの?」

「まず御金が貰える」

ロックは誇らしげにうつ述べた。

「世の中まずお金がないとな」

「それはそうだけれど」

「お金があればどんな苦しみも乗り越えられるだらう。あの音がするだけだな」

「それはそうですけれどね」

「あらヤキーノ」

ヤキーノが「い」で帰つて來た。

「食べ終わつたんで戻つてきました」

「そうなの」

「おう、御前も聞け」

ロックは彼に対しても声をかけた。

「御前も御金は好きだらう」

「そりやまあ」

「お金があれば力も湧いてくるし幸福も訪れるんだ。何もかもお金

がんくては話にもならない」

「それでフィデリオさんのことを総督様にお願いするのね」

「そうだ。働きに見合つたお給料を渡してもらうよつにな

「有り難うござります」

フィデリオはそれに対して恭しく頭を垂れた。

「ですが私は看守長にも申し上げたいことがあります」

「何だい、それは」

「御金よりもさらに入重要なものがあるのです」

「何だ、それは」

ロッコはそれを聞いて首を傾げた。フィデリオはそんな彼に対して言った。

「信頼です」

「信頼」

「はい。何故私が御供をするのを認めて下さらないのですか

「わしの仕事の補佐か」

「そうです。信頼して下さるのなら是非

「気持ちは有り難いが

「では何故」

「どういうわけかロッコはここにまで言葉を濁したのであった。他の者にはそれが極めて不自然であった。

「お父さん、どうしてなの?」

マルシェリーナが父に問うた。

「フィデリオさんを御供にすればいいの?」

「そうだな」

彼は娘に対して応えた。

「そうすればわしの負担も減る。わしも歳だ」

「ええ」

黒いのはもう髭だけであった。それからもわかる。

「総督様もそれを認めて下さるだろ?」

「では何故

「一つ問題があるのは

「それは何?」

「うむ、これは内緒だがな

彼はここで三人を見回した。

「あまり大きな声で話すことじゃない。」つちへ来てくれ」

「ええ」

「わかりました」

彼等はそれを受けロッコの側に集まつた。ロッコはそれを見届けてから話を始めた。

「この牢獄の奥にな、一人の囚人がいるのだ」

「奥に」

「そうだ。その囚人はどうもかなりの重罪人のようなのだ」「何をしたのかしら」

「そこまではわからんが。そこに入つてもう一年になる」

「一年」

「そうだ」

声をあげたフイデリオに答えた。

「一年だ。かなり長いな」

「ええ」

(まさか)

フイデリオはそれを聞いて何やら思ひとこりがあるようだ。しかし顔にも口にも出さない。

「それでその人は何処の人なの?」

「それはわからない」

娘に対してそう答える。

「何で名前ですか?」

「それもわからないのだ。一切不明だ」

ヤキーノにもそう答える。看守長であるロッコですら知らないと、いうことに三人は何やら重大なものを感じ取つていた。

「わかるだろう、それだけ言えば」

「はい」

三人はそれに頷いた。

「フイデリオよ。それでもいいか。知れば何やら厄介なことになる

ぞ

「構いませんよ」

しかし彼はそれでも言った。

「看守になつた時からその覚悟はできていますから」

「そうか」

ロックはそれを聞いて頷いた。

第一幕その二

「御前さんは勇氣もあるようだな。さうに氣に入った」「目的を達成する為なら」

彼は言った。

「勇氣は欠かせないものですから」

「うむ」

「フィデリオさん」

マルツェリーナが声をかけてきた。

「頑張つて下さいね」

「はい」

「そしてその囚人の方にも神の御手を」「わかつています」

「それだけの思いやりの心があれば大丈夫だな」

ロツコはそこまで聞いて決心した。

「では総督様にそれもお願ひするとするか。御前さんをわしの補佐役にすることもな」

「ええ、お願ひします」

「お父さん、絶対よ」

「わかつてある」

娘に対しても答えた。

「ではな」

「はい」

ロツコは部屋を後にして。フィデリオがそれに続く。ヤキーノはここにいても今は無駄だと悟ったのか仕事に戻った。マルツェリーナはそれを見届けた後でアイロン掛けに戻った。彼等はそれぞれの仕事に戻つたのであつた。

この刑務所の門は壁のそれと同じく高く、そして厚い。しかも鋼でできていた。悪魔の装飾が施された漆黒の門であり、それが開か

れることはないようすら思われた。まるで地獄の門であった。

しかし今その地獄の門が開かれた。入口から一人の男が取り巻き達を引き連れ中に入つて来た。

黒い服とマントを身に着けている。厳しい顔をした大きな身体の男でありその目の光は黒く鋭い。まるで魔物のようであつた。髪は黒く後ろに撫で付けられている。黒々と不気味に光つてゐる。

その周りにいる男達もまた不気味な者達であつた。彼と同じく不気味な黒い服を着ていた。だがマントは羽織つてはいない。また黒い服といつても彼等のそれは軍服の様な制服であつた。男の豪奢な貴族のそれと比べると明らかに差があつた。まるで魔王とその従者達のようであつた。

男の名はドン＝ピツアロといつ。この刑務所の所長である。かつてはスペイン警察の重役であつた。そこで酷吏として知られていた。罪なき者達を陥れ、苛烈な拷問により無理矢理自供させ、その財を巻き上げるのを得意としていた。だがそれをとある貴族に追求され、刑務所の所長に左遷されていたのである。狡猾にして残忍、貪欲な男として知られてゐる。

「少ないな」

彼は壁を見上げてそう言つた。

「歩哨の数はもつと多くしや」

「ハツ」

その声に後ろにいる黒服の男達は頷いた。

「橋にもだ。この程度では警護とは言わぬぞ」

「わかりました」

彼等はそれに頷いた。そして左右に散り周りの者にピツアロの言葉を伝えたのであつた。ピツアロはそれを不機嫌そうな顔で眺めていた。

「この程度のことわからぬとはな。無能共が」

そう言いながら橋を渡り刑務所の中に入つた。取り巻き達も入る門が閉じられた。その時重い音が刑務所の中に鳴り響いた。

「お帰りなさいませ」

ロッコが彼を出迎えた。後ろにはフィデリオもいる。

「うむ」

ピッアロはそれに対し傲慢に返した。

「御苦労であった。ところで手紙か何かは届いているか」

「はい」

ロッコはそれに頷いた。そして手に持っているものを差し出した。

「こちらに」

「ふむ」

ピッアロはそれを受け取った。そしてそれの表をまず見た。

「まずは紹介状か。そして詰問状」

「はい」

「見たことのある筆跡だな」

そう言いながら封を切る。そしてその中身を見た。

「これは大臣のものか」

「大臣の！？」

フィデリオはそれを聞いて呟いた。

「！？ロッコよ、そちらにいる者は」

ピッアロも彼に気付いたそしてロッコに尋ねてきた。

「最近新しく入った看守の一人ですが」

「そうか」

「フィデリオと申します。お見知りおきを」

「うむ」

鷹揚に答え手紙に戻った。見ればこの刑務所の囚人の扱いについての詰問状であった。囚人の虐待の噂を聞き、大臣自ら視察に来るというものであった。

「まずいな」

彼はそれを見て呟いた。そして心中で思った。

（大臣は今までフロレストランが死んだものと思っていた。しかしこの刑務所に彼がいると知れば、厄介なことになるな）

彼はこの時自分の首が寒くなつたのを感じていた。大臣とフロレンスタンという男の関係について知つてゐるついでそう思つたのであつた。

（ここは一思いに）
そしてこう思つた。

（やつてしまふか。思い立つたが吉田だ）
急に決意を固めた。

（豆惑つていては駄目だな、毒を食らわば目まぐだ。よく考えてみると今まで生かしておくこともなかつた）
誰かを殺そうと決意したらしく。

（誰かに任せては駄目だな。私でやる。私自身で方をつけろ）
「所長」

黒服の部下達が彼に声をかけてきた。

「どうした？」

「そろそろ中に入られませんか」
「中に？」

「はい。ここにいても仕方がないでしょ」
「そうだな」

「いいでようやく我に返つた。そして辺りを見回した。

第一幕その四

「ここにいても寒いだけだ。では中に入り「
「それが宜しいかと」
「だが楽しみだな」
「?何がでしょうか」
「いや、焦るだけ無駄だと気付いたのでな」
「焦るだけ?」

部下達はそれを聞いて首を傾げさせた。

「どういう意味でしようか」

「何を考えているのだ?」

それはフィデリオも同じであった。ピツアロの話を聞きながらその心を探っていた。

「自分で決着をつければいいと気付いたのだからな」
「(自身で)

「いや、それはいい」

彼は部下達にそう言つて誤魔化した。

「御前達には関係のないことだ」

「左様ですか」

「そう、彼等には関係ない」

フィデリオはそれを聞いて呟いた。

「だが私には関係があることかも知れない」

「ロツコ」

ピツアロはロツコに声をかけてきた。

「はい」

「ラッパ手を見張り台に登らせておくようにな

「わかりました」

「大臣の馬車が見えたなら、すぐ(ラッパで合図するよ)と伝えておけ。よいな」

「はい」

ロッ「はその指示に頷いた。

「頼むぞ。これはボーナスだ」

そう言つて懐から袋を取り出した。

「遠慮なく受け取るがいい」

「これは

手に取ると何やらジャラジャラとした音が聞こえてきた。それから彼はこの中にあるものが金だとわかった。

「とつておけ」

「ラッパ手を手配するだけでこれだけも

「無論それだけではない」

ピツアロはそう断つた。

「これからまた一つ仕事をしてもうひつ」

「どのような仕事ですか?」

「処刑だ」

彼は冷たい声でそう言つ放つた。

「処刑!?

「そうだ、この偉大なるスペイン王国に反逆した愚か者を処刑する

のだ

「まさか

「本当だ。だからこそそれだけの金をやるのだ」

言外に圧力をかけてきた。

(さもないとわしが破滅するからな)

「よいな

「あの男ですよね」

「そうだ、わかっているではないか

ピツアロはそれを聞いて顔をほこりませた。

「ならば話は早い。わかつたな」

「しかしあの男はもう殆ど死んでいますし

「止めをさすのだ」

ロッハはそれをしなくてもいいようにと言ひ逃れをする。だがピツアロはそれを許はしなかつた。逃げ道を塞ぎにかかつてきただつた。

「よいな」

「私はそのようなことをしたことはないですが」

「何!?」

ピツアロはそれを聞いて顔を前に出してきた。

「今何と言つた」

「私は人を殺したことないです」

「馬鹿な。そなたは看守長だらう。長い間にこにしてもか」

「死刑執行人にはなつたことがありません」

弱々しい声でそう答えた。

「そうなのか」

「墓掘りならありますか」

「ではそれでいい」

「はあ」

「実際には私が手を下さつ。よこな」

「わかりました」

「うむ」

「これで決まりであった。ピツアロは納得したように頷いた。
「では行くとしあう。スコップは出しておけよ」

「はー」

ロッハは頷いてからまたピツアロに尋ねた。

「あの」

「何だ?」

「本当にやるのですね? 所長」

「勿論だ」

「長い間苦しんできた罪人を」

「一年もな」

「一年」

「フィデリオはピッコのその一年といつ言葉を聞いて眉を動かせた。そこに何かがあるのであらうか。

「もう充分苦しんでいるのではないでしょうか。少なくとも罪の分だけは」

「罪は永遠に消えるものではない」

ピッコは冷厳にそう返した。

「人間の犯した罪は最後の審判まで消えることはないのだ」

「ですが」

「ですがもこうしたもない」

彼はまたロッコの言葉を遮った。

（わしを脅かした罪は重いぞ）

「罪人は必ずや裁かれなくてはならないからな」

「はあ

「わかつたな。では用意しておけ」

「わかりました」

「私の方も用意をしておく。遅れるなよ」

「はい」

ピッコは部下達を引き連れその場を後にした。ロッコもその場を去った。だがフィデリオは何故かその場に残っていた。そして彼は言った。

第一幕その五

「悪辣な者、何処へ行くつもりか
立ち去つたピツア口を見据えていた。

「荒々しく猛りながら何処へ行くか。御前の心には怒りと憎しみしかないといふのか」

だが当のピツア口はいない。彼はそれでも言つた。

「しかし私の心は違う。暗雲の前の明るい虹が照らしている。それが私を勇気付けてくれる。あの人を助ける為に」

そして決意した。ピツア口のそれとは全く違う決意であった。

「来たれ、希望よ。苦しむ者の最後の星となれ、それが私を導いてくれる」

言葉を続ける。

「私は希望に従う。そしてあの人を救う。希望がある限り私は諦めはしない。そして必ずや目的を果たす」

「おい、フィデリオ」

語り終えたところでロッコが戻ってきて彼に声をかけてきた。

「何か

「御前さんも来てくれないか

「墓掘りにですか？」

「ああ

「宜しいのですか？」

「何だ？」

「囚人達のことです」

「彼はそれを認めた。

「有り難うござります。とにかく一つお願いがあるのですが

「何だ？」

「囚人達のことです」

「彼は言った。

「彼等にお慈悲を与えてあげてはビリijoつか」

「？美味しい食事か？」

「そうですね。日の光を」

「獄長の許可なしでか？」

「事後承諾ということで宜しいでしょつか」

「よいことだがお許しになられるかな」

ロッコは首を傾げた。

「責任は私が取りますから。ですからお願ひします」

「そこまで言うのなら。では頼むぞ」

「はい」

「わしは獄長にお願いしてくる。ではな」

ロッコはピツアロのところに向かつた。いつもして囚人達は狭く、暗い監獄から日の光が照らす緑の庭に出ることができた。彼等はその眩しい光を見上げて喜びの声をあげた。

「本当に久し振りだ、日の光を見られるなんて」

「ああ、全くだ」

彼等は口々に言つ。

「新鮮な空氣に緑の世界。前に見たのは何時だつたか」

「もうそんなことすら覚えてはいない。それだけ昔だつたな」

「監獄は墓場だ。だがここは違う」

「自由だ。そして命がある。それに触れられることの何といふ幸せ

よ

身体全体で喜びを噛み締めていた。フィデリオはそんな彼等を見守りながら何かを探していた。

(いなかの、ここには)

何を探しているのであろうか。はたまた誰かか。彼はそれを囚人達の中から必死に探そうとしていた。しかしそれは中々見つからないうようであった。

「おい、フィデリオ」

そんな彼にロッコが声をかけてきた。

「来られたのですか」

「うむ。上手くいったよ。獄長は快諾して下さった。いいことだと仰つてな」

「それは何よりです

「彼は笑顔を作つてそれに応えた。

「そして御前さんにもいい知らせだよ」

「何でしちゃうか」

「今日からずっとわしの仕事を手伝つてくれ。牢獄にも入つていい」

「本當ですか！？」

「それを聞いて喜びの声をあげた。

「うむ。その奥にいる男だがな」

「はい」

話を聞くその顔が真剣なものになった。

「与えられる食事は次第に減らされている」

「そうなのですか」

「そしてな、殺されることになった」

「何と！」

さつきピッサロが話していたことだ。彼はそれを聞いて愕然とした。

「後一時間程もすればな。いつそりと殺されるのだ」

「死刑は朝の筈ですが」

この時代の歐州においても死刑は朝早く行われるのが普通であつた。そういうしきたりとでも言おうか。ちなみにこの時代人の血は滋養の効果があると言っていた。その為フランスの貴族達は朝まで遊んだ後で処刑場に向かつたりもしていた。そこで死刑囚の血を飲んでいたのである。着飾つた、目の下にクマを作つた紳士淑女達が先を争つて美味そうに人の血を飲む姿はさながら吸血鬼のようだつたという。

「予定は変わるものだ。急に変わつたのだ」

「どうしてですか？」

「所長の御考えだ」

「そうですか」

それを聞いてやはり、と思つた。

「だからですか」

（ではやはりピシタ 口自身が）

彼は話をしながらそう考へていた。

（私は自分の愛する人の墓を掘らなければならないのか？何といつ

恐ろしいことだ。それだけはさせない）

「だからあの男に食べ物をやるのは許されないのだ」

「わかりました」

「ではすぐに来てくれるな。それそろ行くか」

「はい」

「墓掘りこはコジがあつてな」

彼はそう言つた。

第一幕その六

「壊れた水溜りの後に掘るのが一番いいのだ。それは知っているか」「いえ」

そこまでは知らなかつた。墓掘りなぞやつたこともなかつた。

「はじめてですから」

「まあそういうな。嫌な仕事だが我慢してくれ」

「はい」

「何なら一人で行くが」

「いえ、行かせて下さい」

だが彼はそれを引き受けたことにした。

「是非共」

「よいのか」

「承知のうえです。だからこそ側において頂きたいと申し上げたのです」

「わかつた、では行こうか」

「ええ」

二人は行こうとする。しかしそこにヤキーノとマルツェリーナが血相を変えてやつて來た。一人共かなり焦つていた。

「どうしたんだ、一人共。そんな顔をして」

「お父さん、大変よ！」

「所長が！ 看守長をお探しです！」

「わしをか？」

「何があつたのでしょうか？」

「しまつたな」

彼は何かに気付いたらしく困つた顔をした。

「所長に囚人のことを申し上げるのを忘れていたわ」

「獄長の許可は得たのでしょうか？ それなら大丈夫では」

「実はそこから上がつてな」

彼は言った。

「実際は所長の許可が必要なのだ」

「そうだったのですか」

「まざいな、これは」

「早く囚人達を中に入れましょ」

「さもないと大変なことになるわ」

「いえ、もう少しいいのではないでしょ」

うか
だがフイデリオは囚人達を庇つた。

「久し振りのことですし。責任は私が持ちますから」

「しかしな」

「そんなことを話している暇じゃないわ」

「早く何とかしないと」

そういう話しているうちにピッアロがやつて來た。あの黒服の男

達を引き連れている。厳しい顔を更に厳しくさせていく。

「看守長、これはどういうことだ！？」

「所長」

ロッコは彼に身体を向けた。

「私はこのようなことを許可した覚えはないが。説明してもうおつ

か」

「囚人達に恩恵をとましても」

「何故だ？」

「今日は王様の命名日だからでござります」

「そうだったか？」

「はい」

後ろに控える部下の一人がそれに答えた。

「確かにそうだったと記憶しております」

「そうだったのか。忘れていた」

ロッコはそれを聞いて胸を撫で下ろした。実は咄嗟に言つた言い

逃れだったのである。そうした意味でも彼は運がよかつた。

「ですから彼等を出したのです。この者達は構いませんよね」

「そうだな」

見ればあの男はいない。それでピツアロは少し機嫌を取り戻した。
「ではいいだろ。この件に関しては不問に処す」

「有り難うござります」

「だがすぐに仕事にかかり。あの男のことは覚えているな」

「はい」

「ならばよい。ではすぐに取り掛かれ」

「所長」

ピツアロにマルツェリーナとヤキーノが言った。

「何だ?」

「囚人達はどうなのでしょうか」

「私の許可なく外に出すことはできん。すぐに中に戻せ」

「わかりました。それでは」

ヤキーノが合図をする。すると鐘が鳴り囚人達はそれを聞くとうなだれて牢獄の中へと入つて行つた。皆非常に悲しそうな顔をしていた。

「折角外出されたのに」

「これが牢獄なんだ」

囚人達を見て悲しそうな顔をするマルツェリーナに対してもヤキーノがそう声をかけた。

「それはわかつているだろ?」

「けれど」

それでも彼女は不満そうであった。それは彼女の心根故であった。

「それでは短い間だつたが

フィデリオが囚人達の誘導をはじめた。

「早く戻れ。いいな

「わかりました」

囚人達は力なく牢獄の中へと戻つて行つた。皆頃垂れ、沈んだ顔で中に入つて行つた。

ロツコはピツアロに従い牢獄の奥深くへと向かつた。そしてフィ

デリオにも声をかける。

「早く来い」

「わかりました」

彼女はそれに頷き彼の後について行く。その途中意を決して呟いた。

「待つていてね、貴女」

一瞬だが女のような顔になった。

「必ず救い出してみせる」

そして牢獄の奥深くへと入つて行つた。まるでそこにいある何かを取り出そうといつぱん。

第一幕その一

第一幕 勇氣の天使

牢獄の中は暗く沈んでいる。所々が朽ち果て、水で濡つて いる。そこはまるで洞窟のようであり蝙蝠がいても不思議ではなかつた。だがそうした者達はいなかつた。

かわりに罪を犯した者達がいる。彼等はその罪を償つ為にここにいる。狭く、沈んだ世界でその目だけを光らせている。暗闇の中でもその目だけが光つていた。

そのさらに奥に彼はいた。ボロボロになつた囚人の服を身に纏つている。その手足には長い鎖があり、それが身動きを制限していた。牢獄の奥深くで彼は捉われの身となつていたのだ。

その顔は決して卑しくはない。汚れてはいるが見事な金髪に彫刻の様に整つた品のある顔、青い目をしている。だがその青い目には力はなく肌も土氣色だつた。長身の長い牢獄での生活のせいか縮んでいるように見えた。彼は俯き、落胆した顔でそこにいた。

「ここにいてもうどれだけ経つか。静寂と荒廃だけがここにある」牢獄にいる筈の鼠や虫達さえそこにはいなかつた。それはまるで地獄のようであつた。

「神によりこの苦しみを受けた。人生の春はすぐに去つていき今はこうしてここにいる。私は眞実と正義を口にした為にここに閉じ込められた。これは神の御意志であるうか」

それは誰にもわかりはしない。神という存在が善であるかも悪であるかも本当のところは誰にもわからないのだ。彼にとつて善であつても他の者や神にとつては違つかも知れない。人の世とは理不尽なものなのであるから。

「だがそれならいい。私は己の運命を受け入れよう」
彼はそれでもよしとした。

「私は正しいことをした。それはレオノーレがわかつてくれればそ

れでいい。彼女が私を理解してくれているのならそれだけで私は幸せだ」

彼の想う人なのであらうか。レオノーレの名を呼ぶと恍惚となつた。だがそこには何もない。静寂と暗黒だけが支配している。そんな中で彼はただ頃垂れ、座り込んでいた。そうするしかなかつた。

「レオノーレ」

またその名を呼んだ。

「この地獄に光を呼び込んでくれ。御前だけが私の希望、私の全てなのだ。そうしてくれれば私はもう他には何もいらない。喜んでここで死のう」

既に死を覚悟していた。もう諦めていた。彼はただそこで田に見えぬものを見ていた。希望だけを。

その奥に足音が向かつていた。それは一組あつた。

「気をつけろよ」

「はい」

それは初老の男と若い男のよつなものの二つの声であつた。

「ここは滑るからな」

「わかりました。しかし凄い寒さですね」

「地下の奥深くだ。それにここには他に誰もいないからな」

「そうなのですか」

「あの囚人以外は。鼠さえいやしない」

初老の男の声はそう語つていた。冷えきつた暗闇の中に声だけが聞こえてくる。灯りが奥の方に向かう。するとそこに二つの影が映つていた。一人はその手につるはしを二つ持つっていた。もう一人はスコップを一つ持つていた。

「そろそろだぞ」

「はい」

頑丈な鉄格子が見えてきた。そしてその奥に彼がいた。うずくまつていた。

「あれだ」

「死んでいるのですか？」

フイデリオはその囚人がうずくまり、動かないのを見てそう言つた。だがロツコはそれには首を横に振つた。

「いや、生きている」

「生きていますか」

「おそらく眠つているだけだ。死んではいない」

「そうですか」

彼はそれを聞いて安堵したような言葉を出した。そして囚人を見た。

「遂にここまで」

「時間がない。すぐにはじめるぞ」

ロツコはそう言つて彼につるはしを一本手渡した。

「そこがいい。じゃやるか」

水溜りを指し示した。だがフイデリオはその言葉をよそに囚人の方を見ていた。

「おい」

「あ、はい」

声をかけられ我に返つた。

「どうしたんだ、あまり時間はないのだぞ」

「すいません、誰なのか気になります」

「あの囚人が誰なのかはわし等には関係ない」とだ。気持ちはわかるがな

「はい」

（だが私にとつては違う）

心の中でそう呟いたがそれは口には出さなかつた。

「もう少しで所長が来られる。それまでに掘つておかなくてはならないからな

「かなりの深さですよね」

「まあな。人を埋めるのだからな」

ロツコはそれに答えた。

「かなり掘るぞ。急がなくてはならん」

「わかりました。それでは」

「うむ」

少し掘ると石が出て来た。

「これをどけてな」

「ええ」

石をどけた。

「さて、また掘るが」

「わかりました」

「一人はつるはしで掘り続けた。ある程度掘つたところでロジコは

言った。

第一幕その一

「これからはスコップを使ひやせ」

「はい」

「まだ時間はかかりそつだがな。それでも所長が来られるのはもうすぐだ」

「えらく急いでおられるのですね。何故でしよう」

「さてな」

彼はそれに答えるながら腰にある水筒を取り出した。そしてその中にある酒を飲んだ。ブランデーである。身体があつたまつた。それを実感しながら彼はフィーデリオに対して言った。

「どうやら所長にとつては重要な者らしいが」

「所長にとつて」

「ああ。詳しい理由はわからんがな。何でも政治犯らしい」

「そうですか」

彼はそれを聞きながら囚人を見た。まだ眠っているのかうなだれて座り込んだままである。それを見ながら考えていた。

（似ている）

知つている者に似ていると氣付いた。

（本当にあの人なのかも。だとしたら）

「お、起きたな」

ロッコは彼が動いたのを見てそう言った。

「おい、生きているか？」

「?私は今音を聞いているのか」

「ああ。どうだ、久し振りにここに来たんだが」

ロッコは彼に声をかけた。フィーデリオはその時囚人の声を聞いた。

（口の声は）

「生きてるか?話しているところを見ると生きてるようだが」

「何とかな。だがもう死んでいるのも同じだ」

(間違いない)

フィデリオはそれを聞いて確信した。

(あの人だ)

「ここにいる間に何もかもを忘れてしまったようだ。ここは何処だ
つたかな」

「セヴィーリアだよ」

ロッコはそう答えた。

「そうか。そこは牢獄か。所長は？ 確かドン＝ケツアルだったと思
うが」

「代わったよ。今はドン＝ピツアロ様だ」

「ピツアロ」

囚人はそれを聞いて声をあげた。

「ドン＝ピツアロか。警察にいた」

「ああ。それがどうしたんだい？」

「貴方に伝えて欲しいことがあるのだ。お願いできるか

「わしにできることなら。何だい？」

「レオノーレ＝フロレストランという者がセヴィーリアにいる」

(その名は…)

フィデリオはその名を聞いて興奮した。だが囚人とロッコはそれ
には気付かない。

「彼女に伝えて欲しいのだ。私はここに無実の罪で捕われていると。
頼めるだらうか」

「無実かどうかまではわからぬがわかつたよ
「済まない」

彼はそれを聞いて礼を述べた。

「そこにいる若い人にも

「はい」

彼は顔を隠すようにしてそれに頷いた。

「お願いしたのだが

「わかりました。必ずや」

（今受け取つたわ）

心中でも頷いたのであつた。ロッコがまた言つた。
申し訳ありませんが私達ができるのはこれだけです
そう言つてパンを差し出した。

「少ないですがどうぞ」

「有り難う」

彼はそれを受け取つた。そしてゆつくりと食べはじめた。
「美味しいですか？」

「ええ」

「それは何よりです」

ロッコはそれを聞いて笑顔になつた。だがそれは一瞬のことであつた。

「用意はできたか」

ピツアロがそこに姿を現わした。黒い服の上にマントを羽織つて
いた。

「所長」

「御前達の役目は終わつた。去るがいい」

「わかりました。それでは」

ロッコはそれに従いその場を後にした。フィーデリオも連れていた。

「行くぞ」

「はい」

彼もそれについて行つた。こつしてその場はピツアロと囚人だけになつた。

「久し振りだな、フロレスタン」

「その声は。そして私の名を知つてはまさか

「そう、そのまさかだ」

ピツアロはニヤリと笑つてそれに答えた。

「御前に一度失脚させられたピツアロだ。だが今復讐の為にここにいるのだ」

「少な

「私は貴様の悪行を告発しただけだ」

「彼はそう反論した。よろめきながらも立ち上がる。

「罪もない人々を陥れ、その財産を巻き上げるなどもつても他だ」

「他人のものを掠め取つて何が悪い」

「彼はそううそぶいた。

「奪われる方が悪いのだ。それが摂理だ」

「それは悪魔の摂理だ」

フロレスタンはまた反論した。

第一幕その二

「貴様の言つてはいる」とは詭弁に過ぎん

「何とも言え。だが私は貴様のやつたことを忘れはしていない」
そう言いながら懐から小刀を取り出した。

「死ね。せめてもの情けだ。苦しまずに一思いにやつてやる」
「くつ、神よ」

「祈れ」

ピッアロは冷たく言い放つた。

「そして死ね」

「そうはさせない！」

だが突如として二人の間に誰かが入つて來た。

「この人を殺させはしない！」

「貴様は」

見ればフィデリオであった。彼は毅然としてフロレストランの前に立つていた。まるで彼を守るよつに。

「先程の看守ではないか。どうしてここに」

「悪人よ」

彼はそれに答えるよつにしてピッアロを見据えた。

「この人だけはやらせはしない」

「何を言つているのだ、御前は」

彼はそれを聞いて首を少し傾げさせた。

「この男と御前がどういう関係があるのだ。訳のわからないことをするな」

「そうじゃ」

そこに口づ「もやつて來た。

「突然後ろへ駆けていつたかと思つたら。一体どうじつつもりだ」
「私はこれから罪人を罰するのだ」

ピッアロはフィデリオに対してまた言つた。

「だから退け。邪魔をするな」

「どうしてもこの人を殺すといつのか」

「そうだ」

彼は答えた。

「ならばわかつた。この人を殺す前に」

ピツアロを見据えて言つ。

「先にその妻を殺せ！」

「何つ！」

それを聞いてピツアロもロツロも驚きの声をあげた。

「今何と」

「彼より先にその妻を殺せと言つたのだ！聞こえなかつたのか！」

「馬鹿な、それでは君は」

フロレストランもそれを聞いて驚きの声をあげた。

「ええ」

「レオノーラ？馬鹿な、そんな筈が」

「あなた、顔を見て」

彼女は優しい声で夫に対してもう声をかけた。

「あなたの愛する妻がここにいるから」

「・・・・・・・・」

言われるままに顔を見た。見れば確かに見慣れた、懐かしい顔がそこにあつた。

「レオノーラ、間違いない」

「ええ」

「君が・・・・・まさかここに来るなんて」

「あなたを救い出す為に。男に変装してここに潜り込んだのよ」

「そうだつたのか。そして遂にここまで」

「そうよ。どれだけ苦労したか。けれどそれがようやく報われたわ」

「大胆なものだ。まさか夫を助ける為にここまでやって来るのはな」

話を聞いていたピツアロはその厳しい顔に至みまで入れてそう呟いた。

「だが所詮は同じこと。どのみち御前の夫は助かりはしない」「私が助ける！」

「斐ディリオ、いやレオノーラはそう宣言した。

「この命にかえても！」

「死を恐れはしない」ということか」

「そうだ！」

彼女は言い切つた。

「愛する人を助ける為ならこの命惜しくはない！」

「言つたな」

それを聞いたピツアロの身体がワナワナと震えた。

「ならば死ね。二人共な」

小刀を振り上げる。しかしレオノーラも負けてはいなかつた。
「死ぬのは御前だ！」

「ぬつ！」

ピストルを取り出してきた。それでピツアロの動きを止めた。
「これでも動けるというのか！」

「ぬうう、小癪な真似を！」

「少しでも動いたら撃つ！その時こそ御前の最後だ！」

本気だった。それがわかるからこそピツアロは動きを止めた。歯
噛みするしかなかつた。

「さあ、どうする！？」

「ぬうう・・・・・・」

ジリジリと下がりはじめた。それが何よりの証拠であつた。彼は
敗れようとしていた。

「道を開ける、邪悪な者よ」

「・・・・・・・・・・」

「開けなければ御前に死を【】える」

「させるものか」

「では死ぬつもりか」

「おのれ・・・・・・」

暫く睨み合いが続いた。だがそれは上方からラッパの音が聞こえてきた。

「これは」

まずロッコが顔を見上げた。

「大臣が来られたというのか」

「おのれ」

ピッアロはそのラッパの音と大臣といふ言葉を聞いて呪詛の声を漏らした。

「もう少しといふところで」

「悪は正義の前に崩れ去る宿命」

レオノーラは彼に対してもう言つた。

「これが御前の宿命だつたのだ。諦めるがいい」

「まだ言つか、この女は」

最後のチャンスに思つた。小刀を振り下ろそうとする。しかしそれはレオノーラの持つてゐる拳銃により動けはしない。それが一層腹立たしかつた。そうこうしている間に上方から足音が聞こえてきた。

「むつ」

それは一つではなかつた。複数あつた。ヤキーノと兵士達が松明を持つてこちらにやつて來ていたのであつた。

第一幕その四

「ヤキーノ、どうしたんだ?」

「大臣が来られました」

彼はロツコにそう答えた。ピッアロはそれを聞いてさらに不機嫌になつた。

「おのれ

「所長」

ロツコはそんな彼に声をかけた。

「行きましょう、すぐに行かれないと」

「わかつた」

彼はそれに頷いた。忌々しげにフロレストランとレオノーレを見やる。彼は一人を見て舌打ちした。しかしどうにもならないのは彼自身がよくわかつっていた。

一人から目を離してその場を去る。それで終わりであった。ロツコもヤキーノも去つていた。そこにいるのは一人だけとなつていた。「助かつたのか」

「ええ」

レオノーラは夫に対してもう答えた。

「私の為に」

「当然のこと」

彼女は言った。

「貴方を救い出す為なら何でもするわ。だから」

「命をかけてもか」

「勿論よ」

「刃の前に身を晒して」

「刃なぞ怖れはしないわ」

そう言い切つた。

「その程度の苦難、苦難ではないわ」

「では何を苦難と言つのだ」

「貴方がいなことを」

「彼女はそう言い切つた。

「それ以上の苦難はこの世には存在しないわ」

「では私にとつてもそれは同じだ」

「どういうこと?」

「御前がいなこと。それ以上の苦難は存在しない」

「けれどその苦難は今終わつたわ」

「ああ」

フロレスタンは頷いた。

「今再び貴方を胸の中に」

「それは私の言葉だ」

彼はそう言つと妻を自分の中にかき抱いた。

「愛しい妻よ、御前に助けられた」

「それは私の願い」

「これは本当のことなのか」

「そう、本当のことよ」

「私は御前に救い出された」

「私は貴方を救い出した。これこそこの世の最大の喜び」

二人は互いに導きあうようにしてその場を後にする。上へ向かつた。そこには光が待つていた。まるで一人を誘つようにして輝いていた。

外では大臣が到着していた。ファンファーレに迎えられ中に入る。見事な礼服に身を包んでおり、金色の髪を綺麗にまとめている。黒い目が強い光を放つている。がつしりとした身体がそのままの足取りで先に進む。彼がスペインの司法大臣フェルナンドである。

「こここの所長はいるかね」

「はい、こちらに」

黒服の男がそれに応え指し示す。ピッアロが恭しく出て來た。

「ようこそ、このような所にまで。御苦労をおかけします」

「つむ」「

今までの傲慢さは何処へ行つたのか。極めて卑屈な態度であった。

「今日」「」に来たのは他でもない」

「はい」

ピツアロはそれを聞いて身を引き締めさせた。

「陛下直々の御声掛けだ。哀れな囚人達に神の恩恵を下さるべきだとな」

「陛下の」

それを聞いただけで顔が青くなつた。

「だからこそ私はここに来たのだ。罪の軽い者やはつきりしない者は解き放たれなければならない」

「恩赦ですか」

「そう、暴君の厳格な裁きは陛下の欲されるところではない。無論私も」

「わかりました」

それを聞くだけでまた顔が青くなる。

「陛下が受けられた神の恩恵を伝える為に私は来たのだといつ」とをわかつてくれ」

「はい」

「それでだ」

話そうとするとそこにはロッコがやがつて來た。

「フルナンド閣下ですか」

「そうだが。そなたは」

「あ、待て」

ピツアロは彼を呼び止めようとする。

「ここ」の看守長です。卑しい者ですので御気に召されず」

「いや、いい」

フルナンドはピツアロの言葉を退けた。

「話したいことがあるよつだな。まずは名乗つてくれ」

「わかりました。私はここ」の看守長のロッコと申します」

「うむ」

「閣下に御会いして頂きたい者がいるのですが」

「誰だ?」

「何でもありません」

ピッア 口は必死にそれを妨害しようとする。だがそれは適わなかつた。

「待て、私はこの者の話を聞いているのだ。そなたの話ではない」

「しかし」

「そなたの話は後で聞く。今は黙つていいがよい」

「クツ・・・・・・」

彼にとつて全ては終わった。だが観念したわけではなかつた。

第一幕その五

「それは誰だ？」
「この一人です」

そう言って後ろからフロレスタンとレオノーラを招き入れた。レオノーラはフロレスタンを支え、フロレスタンはレオノーラに支えられながらフェル NAND の前にやつて来た。

「まさか・・・・・・」

フェル NAND はフロレスタンの姿を見て驚きの声をあげた。二人は古くからの友人であつたのだ。親友といつてもよい。

「フロレスタンか！」

「フェル NAND か」

二人は互いの顔を見てそう言い合つた。

「まさかこんなところで」

「久し振りだな、元気そうで何よりだ」

「どうしてこんな所に」

「君も大体想像がつくと思うが」

「・・・・・ そうか」

彼にもわかつた。何故友がこんな場所にいるのかを。理解すると共に怒りがこみ上げてきた。

「閣下」

ピツアロが最後のあがきを見せた。

「お話を」

「黙つておれ！」

フェル NAND は彼を一喝した。それで黙らせた。

「今私は友と話をしている。貴様になぞではない！」

「・・・・・・・・・・」

それで黙つてしまつた。以後観念したのか頃垂れでいるだけであった。フェル NAND はその間に友と話を続けた。

「無事で何よりだ。噂では死んだとさえ聞いていたが

「実際に命を落すところだつた」

「・・・・・ そだつたのか」

「悪魔に命を奪われるところだつた。だが天使に命を救われた」

「その天使とは?」

「彼女だ」

そう言つて自分の妻を指し示した。

「我が妻レオノーレだ」

「貴女が私の古くからの友を救い出してくれたのですか」

「はい」

レオノーラは笑みを浮かべてそれに答えた。

「それが願いでしたから。長い間捜し求めていまして」

「そしてどうやつてここに」

「男に化け看守となつていていたのです」

それはロツコが言つた。

「では貴女がフィデリオ」

「ええ」

彼女はマルツェリーナの言葉に頷いた。

「御免なさいね、今まで隠していて」

「いえ、そんな」

マルツェリーナは驚きのあまりびっくりしたらしいのかわかつていなかつた。

「まさかこんなことが」

「驚くのも無理はないさ」

ロツコは娘に對してそつ言つた。

「お父さん」

「何を隠そつわしだつて驚いているのだからな。全く見事に騙してくれたものだ」

「しかしそれにより我が友は救われた」

フェルナンドはそれを聞きながらそう述べた。

「見事なことだ」

「閣下」

そこに将校が一人やって来た。彼が連れて来た者である。

「何だ」

「ドン＝ピツアロはどうじましようか」

「取調べを行え。事情がわかり次第処罰する」

「ハツ」

それを受けピツアロは連れられていった。頃垂れた彼は左右を兵士達に押さえられてその場を後にした。こつして悪は滅んだのであつた。

「復讐の刃は正義のより阻まれる。そして正当な裁きが法廷に出て下される」

「万歳！万歳！」

囚人達も看守達もそれを聞いて万歳を叫ぶ。彼を讃えているのだが、彼は自分が讃えられるのをよしとはしなかつた。

「いや、待て」

「何故でしようか」

「私は讃えられるべきではない。讃えられるのはそなた達に愛を下された陛下と神に対してだ」

「神に」

「そうだ。皆陛下と神を讃えよ」

「はつ」

「そしてこの高貴なる女性を」

次にサオノーラを指し示した。

「身の危険を顧みず夫を救い出した彼女を。皆で讃えるのだ」

「フェルナンド」

「フロレストラン、私は君が羨ましい。天使に加護されているのだからな」

「そんな」

「皆天使を讃えよ！」

「はい！」

皆それに頷いた。

「神は常に我等と共におられるーそして天使もー」

「レオノーラ」

フロレストランはその声の中妻に手をやつた。

「あなた」

「今この声が聞こえるな」

「はい」

「皆が君を祝福してくれている。君を讃えているのだ」

「そう、貴女を」

フュルナンドも言つた。

「愛が貴女を導かれたのでしょ？ 真の愛は恐れを知らない」

「はい」

レオノーレはそれに頷いた。

「私は恐れませんでした。愛の為に」

「そして私を救つてくれた」

「これを天使と言わざして何と言おうか。この様な妻を持つ我が友に祝福あれ！」

「フロレストランに祝福あれ！」

皆それに続いて叫んだ。

「夫の命を救つた妻を讃えよ！ そして彼女をもたらした神を讃えよ！」

「神よ、感謝します！」

「この様な天使を彼に与えた恩恵を、そして正義の力を！」

「あなたはまた私のものとなつたのね」

「そう、永遠に君のものだ」

フロレストランとレオノーラは互いに抱き合つた。

「もう離さないわ、永遠に！」

「最後の裁きのその日まで！」

「万歳！ 万歳！」

暗い刑務所に歓喜の声が木霊した。その声は何時までもそこに鳴り響いていた。

フイデリオ 完

2005・8・13

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3592f/>

フィデリオ

2011年4月28日00時40分発行